

## 第4章 移行期の問題と 引退後の再適応様態

## 第1節 目 的

競技引退に課せられた課題を解決していくためには、まずはじめに、これに関連する実態を把握することが肝心となる。それは、この種の問題領域にアプローチする際の出発点として位置づけることができ、研究の方向性を定めるといった重要な役割を果たす。

そこで、本章では、元学生アスリートを対象として、まず、彼らが引退期（競技生活から引退後の生活に移行する時期）に直面する問題を明らかにする。次に、彼らの有する引退のイメージと引退後の関わり方（現在の取り組み）との関係から再適応様態（アイデンティティ再体制化地位）を類型化し、そのタイプの特徴を引退過程のイメージから明らかにする。

## 第2節 方法

### 1 調査対象

筑波大学在籍時に運動部に所属し、且つ、大学代表としての競技経歴を有し、大学卒業後、1年以上の競技継続の後、競技引退を迎え、既に新たな社会生活への移行を果たしている元学生アスリート 115 名を調査対象とした。

### 2 調査内容

ここでは、郵送法による質問紙調査を実施した(資料7: 本文 p. 268)。調査対象者には、筑波大学体育会に所属する各運動部のOB・OG名簿を手がかりとし、現役当時、大学を代表して各大会に参加したり、学生代表として国際大会などを経験した元アスリートを選定した。選定に際しては、各部の顧問や主務等から得た元アスリートの現役当時の情報を基に行った。

質問紙は2部構成であり、第1部は、調査時点での競技引退に伴うアイデンティティ再体制化後の状況に影響すると予測された8つの要因(自己投入の程度、将来展望、達成感、社会化予期、移行の困難さ、危機の程度、ソーシャルサポート、適応状況)を含む質問項目を25項目設定し、それぞれ5件法により回答を求めた。また、第2部においては、競技引退に関連して元アスリートたちが歩んだプロセスに対するイメージについて13項目からなるSCT(Sentence Complete Test: 文章完成法)を実施した(以下に示す)。ただし、SCT-3とSCT-13はどちらも「引退イメージ」を捉えており、ここではSCT-3の結果を中心に分析することにした。

### 3 評定基準

本章は、SCTの結果（資料 8: 本文 p. 271）を中心に考察を述べていく。

各 SCT 項目に対する回答の分類・評定には、著者を含む 3 名が独立してあたり、その結果、ある程度満足のいく一致率（76.7%）を得ている。また、評定の一致がみられなかった回答については合議の結果、評定の一致を図った。各項目の評定基準は以下の通りである。

①元アスリートとしてのイメージ：SCT-1『競技者としての私は...』は、かつてアスリートであったことをどのように受け止めているのかについて回答を求めており、これに対する肯定的な捉え方を<positive>、否定的な捉え方を<negative>、肯定的でも否定的でもない中立的な捉え方を<neutral>とした。

②競技生活のイメージ：SCT-2『競技生活は私に...』は、競技生活をどのように受け止めているのかについて回答を求めており、これに対する肯定的な捉え方を<positive>、否定的な捉え方を<negative>、肯定的でも否定的でもない中立的な捉え方を<neutral>とした。

③引退のイメージ：SCT-3『競技引退は私にとって...』は、競技引退の心理的影響について回答を求めており、これに対する肯定的な捉え方を<positive>、否定的な捉え方を<negative>、肯定的でも否定的でもない中立的な捉え方を<neutral>、肯定的でも否定的でもある両面価値的（以下、「両価的」とする）な捉え方を<ambivalent>とした。

④引退のきっかけ：SCT-4『競技引退のきっかけは...』は、競技引

退の契機となる出来事は何であったのかについて回答を求めており、敗北体験や記録の伸び悩みなどを含む「競技力・体力低下」、目標達成や挫折などの「競技意欲の低下」、就職や将来展望などを含む「社会化予期」、「怪我・病気」、戦力外通告などの「強制的解雇」、スタッフとの不和や廃部などを含む「競技環境の不備」の6つに分類した。

⑤引退期支援のイメージ：SCT-5『引退に臨む頃、友人や家族など、親しい仲なる人たちは...』は、引退期（競技引退のきっかけとなる出来事から引退後の生活への移行を果たす期間）に受けた周囲からの支援に対するイメージについて回答を求めており、これに対する肯定的なイメージを<positive>、否定的なイメージを<negative>、肯定的でも否定的でもない中立的なイメージを<neutral>とした。

⑥引退後の不安：SCT-6『引退前に引退後の生活で最も気がかりだったのは...』は、引退を迎える前に予め引退後の生活についてのどのような不安をもっていたのかについて回答を求めており、大きくは、「不安あり」と「不安なし」に分類される。但し、前者は、仕事面での不安を抱いていた場合を「仕事面の不安」、収入面での不安を抱いていた場合を「収入面の不安」、健康面での不安を抱いていた場合を「健康面の不安」、自分らしくあることができるかといった不安を抱いていた場合を「自己実現」、自分の去ったあとの環境への配慮が強かった場合を「競技への執着」とした。

⑦引退後の準備：SCT-7『引退前、私は競技引退に備えて...』は、引退を迎える前に予め引退後の生活についてのどのような準備をしていたのかについて回答を求めており、大きく「準備あり」と「準備なし」に分類される。但し、前者は、競技に関連した準備をしていた場合を「競技関連あり」、競技以外の事柄についての準備をしていた場合を「競技

以外あり」、具体的ではないが漠然とした展望を持っていた場合を「漠然」とした。

⑧引退直後のイメージ：SCT-8「引退した直後、私は…」は、引退直後の感情体験に対するイメージについて回答を求めており、これに対する肯定的なイメージを<positive>、否定的なイメージを<negative>、肯定的でも否定的でもない中立的なイメージを<neutral>とした。

⑨現在の取り組み：SCT-9「引退後の私の生活は…」は、引退後の生活に対する関わり方について回答を求めており、これに対して積極的な関わり方をしている場合を<active>、消極的な関わり方をしている場合を<passive>とした。

⑩引退後支援のイメージ：SCT-10「引退後、友人や家族など、親しい仲にある人たちは…」は、引退後の支援に対するイメージについて回答を求めており、これに対する肯定的なイメージを<positive>、否定的なイメージを<negative>、肯定的でも否定的でもない中立的なイメージを<neutral>とした。

⑪引退後の社会関係のイメージ：SCT-11「引退後、私は社会と…」は、引退後の社会との関係に対するイメージについて回答を求めており、これに対する肯定的なイメージを<positive>、否定的なイメージを<negative>、肯定的でも否定的でもない中立的なイメージを<neutral>とした。

⑫引退による自己変化のイメージ：SCT-12「私の引退前と引退後を比べると…」は、引退前後を比べて気づいた変化に対するイメージについて回答を求めており、これに対する肯定的なイメージを<positive>、否定的なイメージを<negative>、肯定的でも否定的でもない中立的なイメージを<neutral>とした。

#### 4 アイデンティティ再体制化地位の類型化

アイデンティティ再体制化の観点から引退後の適応問題を捉えるとき、引退後の生活への直接的な満足感のみではなく、過去の競技引退という危機的体験を含めた上で適応を判断していかなければならないことは、既に、第1章で詳しく検討してきた。ここでは、岡本（1985）の作成した中年期のアイデンティティ地位を参考にして、引退後の再適応様態を引退のイメージ（SCT-3）と現在の取り組み（SCT-9）の2つの要因から類型化を行った。これを、アスリートの引退に伴う「アイデンティティ再体制化地位（the statuses of reconfermation of Identity）」と呼ぶ。アイデンティティ再体制化地位は、①再達成型、②軌道内安定型、③模索型、④停滞・妥協型、⑤不安・防衛型の5タイプに類型化される。以下に各タイプの概要を示した（表4-1）。

①再達成型（identity reachivement）：真剣な生き方の模索を行ってきており、職業や生き方の方向が決まった後は充実感や安定感が大きく、職業や生き方に深く関与している。

②軌道内安定型（related in-field achievement）：否定的な変化を受動的に受け止め再吟味していない。内的には安定し、積極的に関与する対象はあるが、模索の経験がほとんどない。

③模索型（searching for self）：様々な役割に挑戦したいという願望を持ち、適職と自分の生き方を求めて模索を経験したが、自己確立感に乏しく、模索や自己探求が継続している。

④停滞・妥協型（stagnant defeatism）：模索の経験がなく現状に至っている。何となく満たされない感覚を持つてゐるが、それを改善しようとする意欲に欠け、妥協している。

表 4-1：アイデンティティ再体制化地位とその概略

アイデンティティ再体制化地位	引退のイメージ	現在の取組	概略
再達成	<i>positive</i>	<i>active</i>	生き方を真剣に模索してきており、職業や生き方の方向が決まった後は充実感や安定感が大きく、職業や生き方に深く関与している。
軌道内安定	<i>neutral ambivalent</i>	<i>active</i>	否定的な変化を受動的に受け止め再吟味していない。内的には安定し、積極的に関与する対象はあるが、模索の経験がほとんどない。
模索	<i>negative</i>	<i>active</i>	様々な役割に挑戦したいと思い、適職と自分の生き方を求めて模索を経験したが自己確立感に乏しく模索や自己探求が現在も継続している。
停滞・妥協	<i>positive neutral ambivalent</i>	<i>passive</i>	模索経験がなく現状に至っている。何となく満たされない感覚を持っているが、それを改善しようとする意欲に欠け、妥協している。
不安・防御	<i>negative</i>	<i>passive</i>	模索の経験をほとんど持たずに職業や生き方を決定しており、その後も自分の仕事や生活に取り組む意欲に欠け、その打開策もない。

注)

引退のイメージ

肯定的：*positive*否定的：*neutral*両価的：*ambivalent*否定的：*negative*

現在の取組

積極的：*active*消極的：*passive*



⑤不安・防衛型 (escapism) : 模索の体験をほとんど持たずに職業や生き方を決定しており, その後も自分の仕事や生活に取り組む意欲に欠け, その打開策もない.

### 第3節 結果と考察

ここでは、まず、調査対象者の属性と全体的な傾向を把握し、次に、引退期に伴う問題について触れ、最後に、アイデンティティ再体制化地位の特徴について引退過程のイメージを基に検討する。

#### 1 対象者の属性と全体的な傾向

質問紙調査は、115名（男性：104名、女性：11名）に郵送され、回収されたのは、72名（男性：64名、女性：8名）であり（回収率62.6%）、平均年齢は33.5歳（23-39歳）であった。

質問項目への記入もれなどが認められる回答を分析対象から外し、最終的には66名（男性：58名、女性：8名）が分析対象となった。その中で、既婚者が57名（86%）であったのに対して、未婚者は9名（14%）であった。また、彼らが現役選手当時に専門種目としたのは、陸上競技（36名）、サッカー（14名）、バスケットボール（8名）、柔道（8名）の4種目であった。一方、調査時点において彼らが従事していた職業については、教員（39名；60.9%）が最も多く、これは筑波大学が教員養成課程を有することに大きく依存している。次いでサービス業を含む会社員（14名；21.8%）、プロ競技の指導者（4名；6.3%）、公務員（3名；4.7%）、自営業（1名；1.6%）、主婦（1名；1.6%）、その他（2名；3.2%）の順であった。分析対象者の年齢は、平均27.3歳（23-35歳）、競技継続継続年数は平均15年7ヶ月、引退後経過年数は平均6年4ヶ月であった。

次に、各SCT項目から得られた結果を示した。

SCT-1では、元アスリートとしてのイメージについて回答を求めた。

その結果、「競技力向上のために一生懸命努力した」や「充実した生活を送ることができた」など、アスリートであった自己を肯定的に捉えている者が47名(71.2%)、「努力が足らなかった」や「今考えると甘かった」など否定的に捉えている者が11名(16.6%)、「もう一人の自分」や「良くも悪くもなかった」など肯定的でも否定的でもなく中立的に捉えている者が8名(12.1%)、それぞれ認められた。

SCT-2では、競技生活のイメージについて回答を求めたところ、本調査の「充実感を与えてくれた」や「多くの財産を残してくれた」など、分析対象者の全てが肯定的に捉えていることが確認された(66名:100%)。

SCT-3では、「引退のイメージ」について回答を求めたところ、「いつかは来るものと思っていた」や「単なる通過点である」など中立的に捉えている者が24名(36.4%)、「第2の人生を始めるきっかけであった」や「次の新たな目標へ向けての出発となった」など肯定的に捉えている者が17名(25.8%)認められた。また、「少し悔いが残る」や「残念だった」など否定的に捉えている者が14名(21.2%)確認され、「淋しいことだが、新たな始まりでもある」や「残念でもあり、嬉しいことでもあった」など両面的に捉えている者が11名(16.6%)認められた。

SCT-5では、移行期支援のイメージについて回答を求めたところ、「理解を示してくれた」や「同意してくれた」など、肯定的に捉えている者が35名(53.0%)、「興味をもってはくれなかった」や「多くの者が反対した」など、否定的に捉えている者が14名(21.2%)、「いつもと変わらなかった」や「自然に受け止めた」など、中立的に捉えている者が17名(25.8%)認められた。

SCT-8 では、引退直後のイメージについて回答を求めたところ、「満足感でいっぱいであった」や「次の目標へ向けてがんばった」など、肯定的な感情を体験した者が22名(33.3%)であったのに対して、「何もせずボーッとしていた」や「未練が残った」など否定的な感情を体験した者21名(31.8%)がであった。その他、「特に変化はなかった」や「ホッとした」などの肯定的でもなく否定的でもなく中立的な感情体験をした者が23名(34.9%)認められた。このような引退直後のイメージは、競技引退に伴う移行体験の困難さを反映しているものと考えられた。

SCT-9 引退後の生活に対する関わりについては、「充実している」や「仕事で忙しくなった」など引退後の生活に積極的に関わっている者が42名(64%)であったのに対して、「つまらない」や「何となく無気力だ」など消極的な関わりをしている者が24名(36%)であった。

SCT-10 では、引退後支援のイメージについて回答を求めたところ、「変わらない」や「いつもと同じ」など中立的に捉えている者が25名(37.9%)、「私を励ました」や「温かく見守ってくれた」など肯定的に捉えている者が22名(33.3%)、「付き合いことが少なくなった」や「関心を示さなかった」など否定的に捉えている者が19名(28.8)であった。

SCT-11 では、引退後の社会関係のイメージについて回答を求めたところ、「うまく付き合っている」や「より密接な関係になった」など肯定的に捉えている者36名が(54.5%)、「何ら変わらない」や「いつもと同じ」など中立的に捉えている者20名が(30.3%)、「特にない」や「さらに隔たりを感じている」など否定的に捉えている者が10名(15.2%)であった。

SCT-12では、引退前後を比べて気づいた変化に対するイメージについて回答を求めたところ、「人間的に大きくなった」や「成長した」など肯定的に捉えている者が37名(56.1%)、「あまり変化はない」や「忙しい」など中立的に捉えている者が17名(25.8%)、「少し自信がなくなった」や「集中力に欠けるような感じがする」など否定的に捉えている者が12名(18.2%)であった。

これらの結果から、本研究の分析対象者となった元学生アスリートの全体的な傾向として、以下のような事柄が確認できる。

分析対象者となった元学生アスリートは、競技生活を充実していたと捉えている者が多く(SCT-1)、引退後、アスリートであったことに満足している傾向が強かった(SCT-2)。競技引退に対しては、個人によって様々な受け止め方が認められ(SCT-3)、競技生活から引退後の生活へ移る際に、支援的な環境にあったとする者が多く(SCT-5)、引退後の生活への移行も概してスムーズであったといえる(SCT-8)。また、引退後の生活に対しては、積極的に関与している者が多く(SCT-9)、支援的な環境にある者が多かった(SCT-10)。社会との関係も概して親密であり(SCT-11)、引退を通じて自己に肯定的変化を体験したとする者が多かった(SCT-12)。

また、調査対象者がかつて筑波大学体育会に所属し、競技生活を営んでいたことを考慮すると、彼らに何らかの共通する特徴が認められることも予測された。

## 2 引退期に関連した問題の把握

本章の目的で触れたように、引退期において、元アスリートたちがどのような問題を抱えていたのかについて明らかにすることは、引退後の

適応問題を解明していく上で重要な意味を有しているといえる。従って、ここでは、引退のきっかけ (SCT-4) , 引退後の不安 (SCT-6) , 引退後の準備 (SCT-7) など、元アスリートたちが体験した引退期に関連する問題について考察を述べる。

SCT-4 では、競技引退の契機となる出来事 (引退のきっかけ) について回答を求めた (図 4-1) 。その結果、引退のきっかけとして「自分よりも実力が下の者に負けたこと (敗北体験) 」や「自分で納得のいく動きができなくなったこと (体力の低下) 」などの「競技力・体力の低下」を挙げた者が 19 名 (28.8%) , 「燃え尽きである」や「目標としていた大会を終えたこと」などの「競技意欲の低下」を挙げた者が 11 名 (16.6%) , 「就職し、自立して生活しなければならなかったこと」や「将来やることとのギャップを感じたこと」などの「社会化の予期」を挙げた者が 11 名 (16.6%) , 「怪我の完治が望まれなくなったこと」や「病気で入院したこと」などの「怪我・病気」を挙げた者が 9 名 (13.6%) , 「強化選手から外されたこと」や「若手が台頭してきたことで引退を勧められた」などの「強制的解雇」を挙げた者が 8 名 (12.1%) , 「自分を理解してくれる指導者がいなくなった」や「仕事が忙しくなり、競技に取り組めるような雰囲気ではなくなったこと」などの「競技環境の不備」を挙げた者が 8 名 (12.1%) , という結果を得た。

先行研究の中では、引退のきっかけとなる出来事が引退後の生活への適応に影響するという指摘は多く (Ogilvie & Howe, 1982; 1986; Ogilvie & Taylor, 1993a; Ogilvie & Taylor, 1993b; Taylor & Ogilvie, 1994; Werthner & Orlick, 1986) , 特に怪我や挫折体験など突然の出来事を契機に引退を迎えたアスリートは、引退期において困難を体験する可能性が高いとされている (Mihovilovic, 1968) 。つまり、引退の

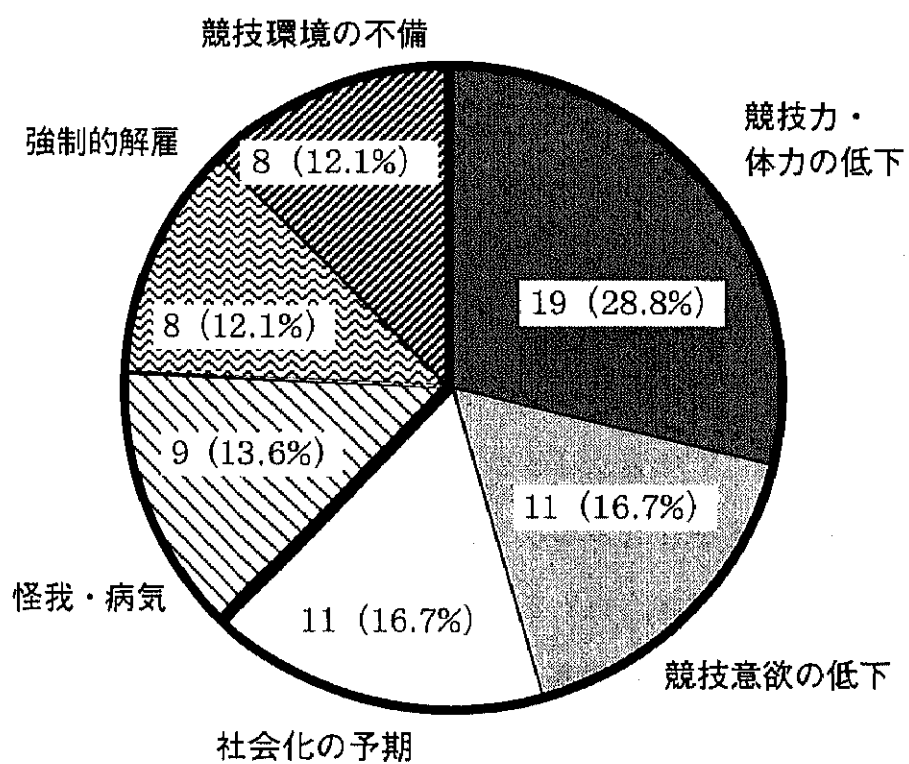


図 4-1：引退のきっかけ

きっかけは、個人の統制の所在 (locus of control) によって自発的もしくは強制的に大別され、この違いによってその後の適応も大きく異なることが予測される。ここで得られた結果も、競技力・体力の低下、競技意欲の低下、社会化の予期などを「自発的なきっかけ」と、怪我・病氣、強制的解雇、競技環境の不備などを「強制的なきっかけ」と置き換えるならば、前者は、引退へ向けてある程度の予想を可能にさせ、それによって引退への心理的準備の可能性が高めるものと考えられる。一方、後者は、不意に訪れることが想定され、準備性に乏しく、従って、その後の適応に伴って困難を体験することが予測された。

次に、SCT-6では、予め引退後の生活に対してどのような不安を持っていたのか(引退後の不安)について回答を求めた(図4-2)。その結果、何らかの気がかりがあったとした者が45名(68.2%)であったのに対して、何ら気がかりはなかったとした者が21名(31.8%)認められた。前者においては、「自分らしくいられるかどうか」や「目標がなくなってしまうこと」など、いわゆる「自己実現」についての不安があったとする者が19名(28.8%)、「運動不足や体力不足」や「体調の維持・変化」などの「健康面」を挙げている者が11名(16.7%)、「仕事の足場を固めること」や「仕事の内容についていけるかどうか」などの「仕事面」を挙げている者が8名(12.1%)、「家族の家計」や「給料が減ること」などの「財政面」を挙げた者が4名(6.1%)、そして、「自分の記録がいつまで残るのかということ」や「引退後のチームのこと」など、「競技への固執」を挙げた者が3名(4.5%)、それぞれ認められた。一方、後者(21名;31.8%)は、「特になし」や「何もなかった」など、引退後の生活に対して懸念や不安がなかったと回答していた。



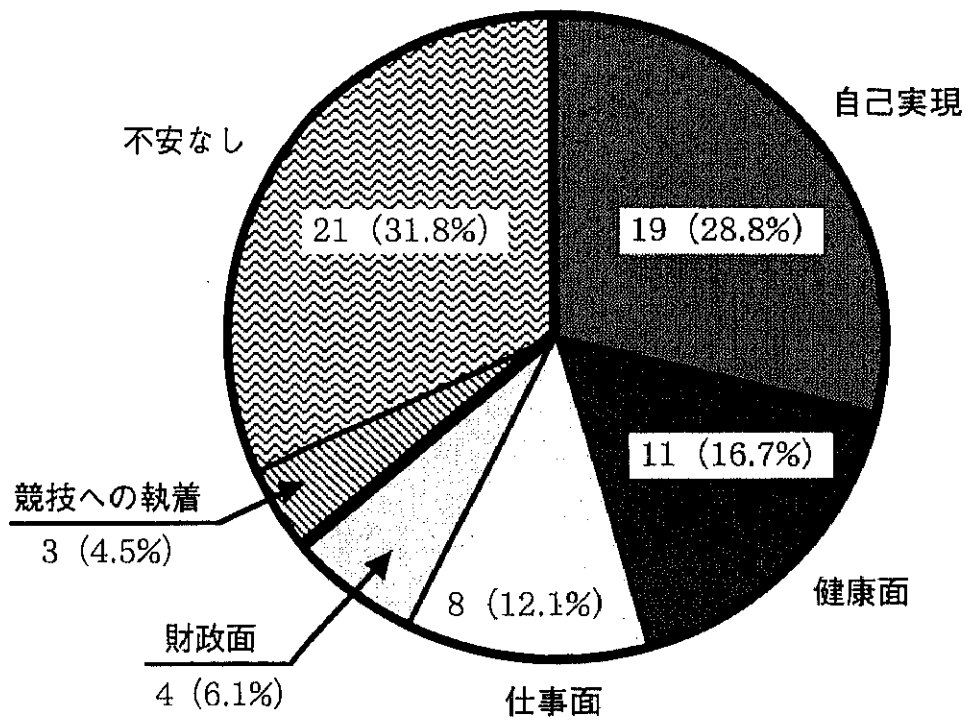


図 4-2：引退後の不安

引退に直面するまで、自身の引退について考えたことがなかったとするアスリートは多く (Haerle, 1975) , それには、個人が獲得した教育レベル (学歴) が関与するという報告もみられる (Arviko & Lerch, 1981) . しかし、ここで得られた結果からは、予め引退後の生活に不安を抱いていた者が比較的多かったことが分かる。引退後の生活への不安は、準備性を高め、引退に伴う移行の困難を除去・緩和する効果があるとも予測される (Coakly, 1983; Hill & Lowe, 1974; Person & Petitpas, 1990) . また、本研究における対象者の多くが引退後に教員としての生活を営んでおり、アスリートからの移行において、予め移行対象が明白になっていたと予測できる。このことにより、困難さを体験することなく、比較的スムーズに移行を果たしていたといえるのではないだろうか。

SCT-7 では、引退する前に引退後の生活に対してどのような準備をしていたのか (引退後の準備) について回答を求めた (図 4-3) . その結果、何らかの準備をしていたとする者が 29 名 (43.9%) , 何ら準備をしていなかったとする者が 37 名 (56.1%) であった。前者においては、「悔いの残らないようにトレーニングに取り組んだ」や「引退するために、最後の大会を選んだ」など、引退に際して競技関連の準備をしていた者が 14 名 (21.2%) , 「やりがいのある仕事を考えた」や「仕事についての勉強をした」など、競技関連以外の準備をしていた者は 10 名 (15.2%) , 「次に進む道をぼんやり考えていた」や「気持ちを切り換えようと努力した」など、具体的ではないが漠然した展望をもっていた者が 5 名 (8.6%) , それぞれ確認された。一方、後者 (37 名:56.1%) は「何もしていなかった」や「特にない」など、引退後の生活へ向けての準備をしていなかったと回答していた。

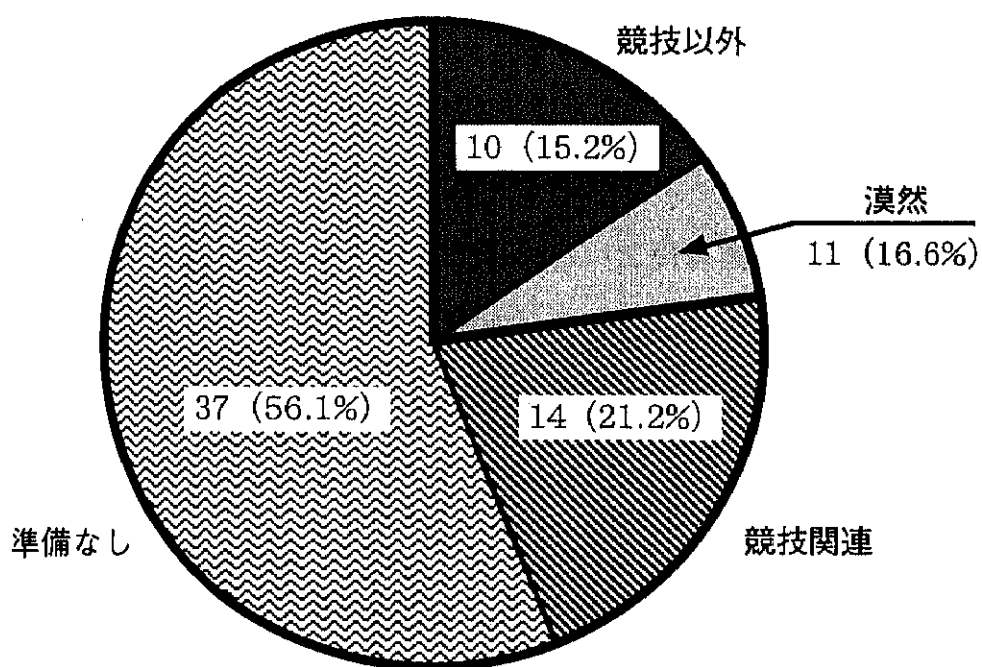


図 4-3：引退後の準備

引退後の準備や展望を持たずに、引退を迎えているアスリートが多いという指摘は少なくない (Arviko & Lerch, 1981; Haerle, 1975; Sovoboda & Vanek, 1982)。本研究においても、対象者となった元学生アスリートのうち比較的多くの者 (37名: 56.1%) が、引退後の生活へ向けて予め準備をしていたわけではなかった。特に、何らかの形で競技関連以外の準備をしていた者は、全体の 31.8% (21名) に過ぎず、実に多くのアスリートが引退後の生活へ向けての準備をしないままこの時期を過ごしていることが分かる。

特に、SCT-6 (引退後の不安) において、引退後の生活に対する不安を予め感じなかったや競技に関連する不安に止まっていたと回答した 25名のうち、SCT-7 (引退後の準備) において引退後の準備を何もしなかったと回答した者は 19名 (76.0%) も認められている。つまり、予め引退後の生活に対する不安がなかった者は、引退後の生活への準備もしていない傾向にあることが確認されたことになる。

### 3 アイデンティティ再体制化地位の特徴

先に示したように、引退期に関連した問題をここでは、まず、引退後の再適応様態を分類する基準である「引退のイメージ (SCT-3)」と「現在の取り組み (SCT-9)」の評定結果から、アイデンティティ再体制化地位の分類を行った。各タイプへは、再達成型に 14名 (21.2%)、軌道内安定型に 20名 (30.3%)、模索型に 8名 (12.1%)、停滞・妥協型に 20名 (30.3%)、不安・防衛型に 4名 (6.1%) がそれぞれ分類された (表 4-2)。

次に、各タイプの特徴について、元アスリートとしてのイメージ (SCT-1)、競技生活のイメージ (SCT-2)、引退期支援のイメージ

表 4-2：アイデンティティ再体制化地位と引退過程のイメージ

アイデンティティ 再体制化地位	n	評 定	SCT-1 競技生活	SCT-5 引退期援助	SCT-8 引退直後	SCT-10 引退後支援	SCT-11 社会関係	SCT-12 自己変化
再達成型	14	positive	12	8	5	5	10	9
		neutral	0	4	5	4	3	4
		negative	2	2	4	5	1	1
軌道内安定型	20	positive	12	10	8	8	7	10
		neutral	2	4	8	7	8	5
		negative	6	6	4	5	5	5
模索型	8	positive	7	5	4	4	6	6
		neutral	1	1	1	3	1	0
		negative	0	2	3	1	1	2
停滞・妥協型	20	positive	14	9	5	3	11	11
		neutral	2	6	7	10	7	6
		negative	4	5	8	7	2	3
不安・防衛型	4	positive	3	3	0	2	2	1
		neutral	0	1	2	1	1	2
		negative	1	0	2	1	1	1

(SCT-5) , 引退直後のイメージ (SCT-8) , 引退後支援のイメージ (SCT-10) , 引退後の社会関係のイメージ (SCT-11) , 自己変化のイメージ (SCT-12) , といった7つの観点から考察する。これらの観点は、まとめて「競技引退過程のイメージ」とすることができる。SCTを採用したのには、元アスリートたちが引退に関連して体験したプロセスに対して、より現実的なアプローチをしようとする意図が含まれている。しかしながら、結局、以下に示す結果に対しては統計的有意性が認められたわけではなかった。従って、ここでは、各タイプの特徴を仮説的に捉えることになる。

先にも触れたように、本研究の対象者は、全般的に、競技生活に対して肯定的なイメージを有しており (SCT-2) , かつてアスリートであったことに対して肯定的で (SCT-1) , 引退期には支援的環境にあったことが確認されている。この傾向は5つのタイプに共通するとみてよいだろう。従って、以下ではこれ以外の観点について触れることにする。

再達成型の14名については、引退後の社会との関係において肯定的なイメージを有しており (SCT-11) , 引退を通じて肯定的な自己変化を体験している者が多いことがうかがえる (SCT-12) 。彼らの場合、模索体験を経て引退後の生活へ傾倒しており、比較的適応状態にいたることが想定される。このことから、競技生活から引退期、引退後の生活といった競技引退過程に対して、肯定的なイメージを有するケースが多いと捉えることができる。

軌道内安定型の20名については、引退直後に否定的な感情体験をしていた者が少なく (SCT-8) , 引退を通じて肯定的な自己変化を体験したと捉えている者が多いといえる (SCT-12) 。つまり、再達成型と同様に、引退過程全般を通じて肯定的なイメージを有していた者が多い

ことが確認でき、引退後の適応様態としては比較的適応傾向にあるといえる。しかしながら、彼らの場合、模索体験がないことが想定されることから、引退直後においても否定的なイメージを有する者が少ないといえるだろう。彼らは、社会的には適応できてはいるが、新しい自分探しといった課題についてはあまり目を向けることなく、この時期を過ごしてしまっている恐れがある。この課題を曖昧に、もしくは未達成のまま、通り過ぎてしまうことは、発達的にみると重大な問題を内包してしまうことになる（岡本, 1997）。つまり、このタイプは、今後、人生における危機的場面に遭遇した場合、深刻な問題を呈することが危惧された。

模索型の8名については、特に、引退後の社会との関係において肯定的であることが指摘できる（SCT-11）。引退後に社会に対して積極的な関わりを持とうとしていることは、ある種、彼らが模索の最中にあることの裏付けとも捉えることができる。

停滞・妥協型の20名については、引退後の社会との関係に対して肯定的なイメージを有し（SCT-11）、引退を通じて肯定的な自己変化を体験したとする者が多い（SCT-12）。その一方で、引退直後には肯定的な感情体験をしている者が少なく（SCT-8）、引退後に支援に対しては肯定的でも否定的でもないイメージを有している場合が多いことがうかがえる（SCT-10）。実体験のない事象に対して、リアリティのあるイメージを有することは困難であることを考慮すると、彼らは、引退後に支援を求めることができず、これが影響して引退後の生活に対する不満を改善することができずにいるのかもしれない。

最後に、不安・防衛型の4名については、引退過程のイメージからその概要に触れることは難しいといえる。しかし、彼らにとって競技引退は否定的な意味を有し、引退後の生活に対して受動的に取り組んでいる

ことから、不適応傾向にあることが予測される。彼らが引退期にどのような体験をし、どのような影響を受けて不適応に至るのかについて解明していくことが、重要な課題であるといえるだろう（吉田, 1999）。



#### 第4節 本章のまとめ

本章では、元学生アスリートを対象として、まず、彼らが引退期に直面する問題を明らかにし、次に、引退のイメージと引退後の関わり方(現在の取り組み)との関係から再適応様態を類型化し、そのタイプの特徴を引退過程のイメージから指摘してきた。

分析対象者の全般的な傾向として、以下のような事が明らかとなった。

彼らは、競技生活を充実していたと捉えている者が多く、引退後、アスリートであったことに満足している傾向が強かった。競技引退に対しては、個人によって様々な受け止め方が認められ、競技生活から引退後の生活へ移る際に、支援的な環境にあったとする者が多く、引退後の生活への移行も概してスムーズであったといえる。また、引退後の生活に対しては、積極的に関与している者が多く、支援的な環境にある者が多かった。社会との関係も概して親密であり、引退を通じて自己に肯定的変化を体験したとする者が多かった。

次に、引退期に関連した問題として、以下のような事柄が確認された。

①引退のきっかけとなる出来事は、自発的なきっかけと強制的なきっかけに大別され、前者は、引退へ向けてある程度の予想を可能にせしめ、心理的準備を促し、後者は、引退へ向けて準備性に乏しく、適応に伴う困難さを体験することが予測された。

②概して、予め引退後の生活への不安を有していた者が多く、困難さを体験することなく、比較的スムーズな移行を果たしていたといえる。

③多くの対象者が予め引退後の準備をしてはいなかった。特に、引退後の生活を不安に思わなかった者のが、引退後の準備もしていないといった傾向が確認された。

次に、引退後の再適応様態として5つのアイデンティティ再体制化地位へ類型化が行われ、再達成型に14名(21.2%)、軌道内安定型に20名(30.3%)、模索型に8名(12.1%)、停滞・妥協型に20名(30.3%)、不安・防衛型に4名(6.1%)がそれぞれ分類された。

さらに、各タイプの特徴が、引退過程のイメージから検討され、以下のような事柄が指摘された。

①再達成型は、模索体験を経て引退後の生活へ傾倒しており、比較的適応状態にいたることが想定され、このことから、競技生活から引退期、引退後の生活といった競技引退過程に対して、肯定的なイメージを有するケースが多いと捉えることができる。

②軌道内安定型は、模索体験がないことが想定されることから、引退直後においても否定的なイメージを有する者が少ないといえるが、その後、人生における危機的場面に遭遇した場合、深刻な問題を呈することが危惧された。

③模索型は、引退後に社会に対して積極的な関わりを持つようとしており、ある種、彼らが模索の最中にあることを裏付けているといえる。

④停滞・妥協型は、引退後に支援を求めることができず、これによって引退後の生活に対する不満を改善することができずにいるのかもしれない。

⑤不安・防衛型は、不適応傾向にあることが予測されたが、該当者が少なく、今後、この種の不適応傾向にある元アスリートを捉えていくことが課題として挙げられる。

さて、これら各タイプの特徴は、統計的有意性に基づいて検討されたわけではなく、その妥当性には再検討の余地が認められた。その点からすると、このような考察には大きな限界を認めざるを得ない。つまり、

ここで提示されたアイデンティティ再体制化地位については、引退過程を押さえながら、その詳細を検討することが求められているといえる。

一方、本研究において得られた結果に関しては、対象者の同質性も影響していることは否めない。今後は、他の体育系大学、さらには体育系以外の大学出身者へと対象を拡大すべきであり、そこからは新たな知見を加えることも可能となろう。

これらのことを踏まえつつ、次章では、個々のアスリートが引退に関連して辿ったプロセスにアプローチしていくことにする。なぜならば、各タイプの事例を取り上げ、引退に関連したプロセスを詳細に検討していくことによって、各タイプの特徴やその差異に影響する要因を明らかにすることができるからである。